

モンゴメリ著、村岡花子訳「アンの幸福—赤毛のアン・シリーズ 5—」新潮文庫、新潮社 2008年2月25日刊を読む

1. 「道っておもしろいものじゃない、ルイス？」と、アンは夢みるように言った。「まっすぐな道ではなく、行き止りがあつたり、こんぐらがついていたりして、その向こうに美しいものや、思いがけないものが隠れていたりする道のことよ。あたしはもとから道の曲り角が好きなの」
2. 「このドーリッシュ街道はどこへ行くのかな？」
と、ルイスは実際的なことを言いだしたが、同時に心の中ではシャーリー先生の声はいつでも春を思わせると考えていた。
3. 「あたしはおそろしく学校の先生然として、この街道はどこへも行くんじゃないありません、ここにいるのですと返事をしてもいいところだけれど、でも、あたしはそうは言わないわ。これがどこへ行こうが、どこへ出ようが、だれがかまうものですか？ 世界の果てまで行って、また戻ってくるのかもしれないことよ、たぶん。エマソン(注訳 米国の思想家。1803-82)の『おお、わたしが時となんの関係があるのか？』という言葉思い出してごらんなさいな。それがきょうのあたしたちのモットーよ。しばらくの間あたしたちが宇宙をほっといても、宇宙はなんともならないことでしょう。あの雲の影をごらんなさいな——あの緑の谷の静かなこと——両角にりんごの木が一本ずつ立っているあの家をごらんなさいな。春になったらどんなか想像してごらんなさい。きょうのような日には人は生きていくという感じを味わい、世界のあらゆる風が自分の姉妹だという気がするわ。この街道に香りの強い羊歯の茂みがたくさんあつてうれしいこと——蜘蛛の巣のかかった羊歯。蜘蛛の巣が妖精のテーブル掛けだというふりをしていたころのことが、いえ、そう信じていたころのことが思い出されるわ——ほんとうにあたしそう思いこんでいたのよ」
4. 黄金色の窪地に路傍の泉を見つけた二人は細かい羊歯のかたまりかと思われる苔の上ですわり、ルイスが樺の皮でこしらえたコップで泉の水を飲んだ。
5. 「自分が喉がからからに渴いて水を発見したとき、初めてほんとうの水のありがたさがわかりますよ。西部で敷設中の鉄道で働いていたあの夏の暑い日に、僕は草原で道に迷ってしまい、何時間もさまよい歩いたことがありました。喉が渴いて僕死ぬかと思いましたよ。そのうちにある移住者の小屋にたどりついたところ、そこにひとかたまりの柳にかこまれてこのような泉があつたんです。どんなに飲んだことか！ それ以来、僕は聖書に書いてあるよい水を愛する気持ちがわかるようになりました」
6. 「あたしたち、また別の方面からも水を授かるんじゃないかしら」と、アンは心配そうに言った。「俄か雨がくるらしいわ……ルイス、あたし俄か雨は大好きだけれど。でも、いちばんいい帽子をかぶっているし、二番目にいい服を着てきたんですもの。しかも、この半マイル以内のところの家

は一軒^{けん}もないし」

7. 「あそこに人の住んでいない、古い鍛冶場^{かじば}がありますよ。でも、走って行かなくちゃならない」と、ルイスが言った。

P258 ~ 260

[コメント]

モンゴメリ作、村岡花子訳、新潮社版「赤毛のアン」シリーズ第 5 巻は、大学を終えたアンが、3 年間高校の校長を勤めたときの物語。一話一話を丁寧に読むと、読書、本を読む楽しみをひしひしと感ずることができる。1956 年(昭和 31 年)に村岡花子先生によって紹介されたこの本を、戦後 11 年目の日本の国民はどのような思いで読みふけたのかを想像するのも興味深い。是非御一読を。

— 2015 年 5 月 3 日(憲法記念日) 林 明夫記 —